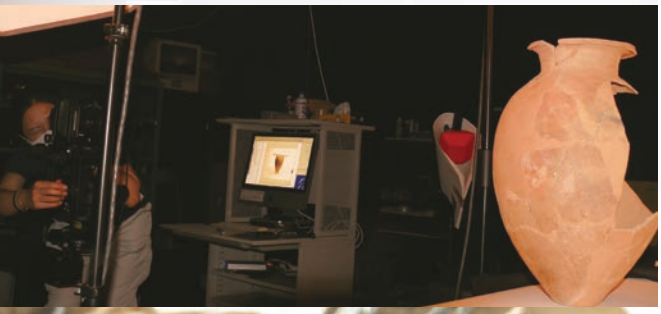
ISSN 2436-889X

愛比売



はじめに

この冊子は、当センターが二〇二一（令和三）年度に実施した発掘調査事業や普及活動事業などの概要をとりまとめたものです。

新型コロナウイルス感染拡大はいまだ収束の様相が見られず、普及啓発事業等の一部中止や開催形式の変更など、昨年度も対応・対策を余儀なくされました。しかし、今治道路や松山駅西口南江戸線の建設および道前平野農地整備に伴う発掘調査、また、新居浜バイパスの報告書の刊行など、過年度から継続して実施している受託事業については問題なく行うことができました。

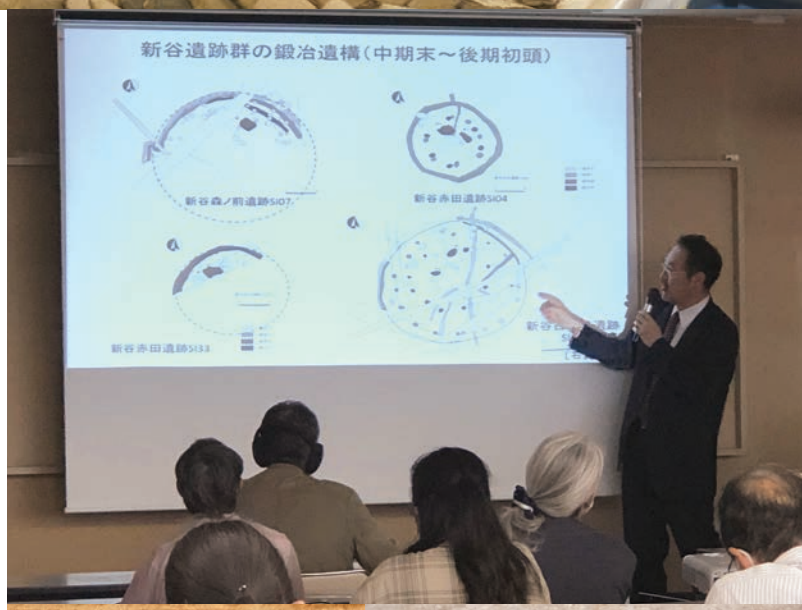
本書が地域における歴史や考古学研究の資料として活用され、県民の方々に埋蔵文化財保護の重要性に対する理解と、地域の歴史への関心を深めていただくことに役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、各事業の実施にあたり、御指導・御協力いただきました関係諸機関ならびに関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

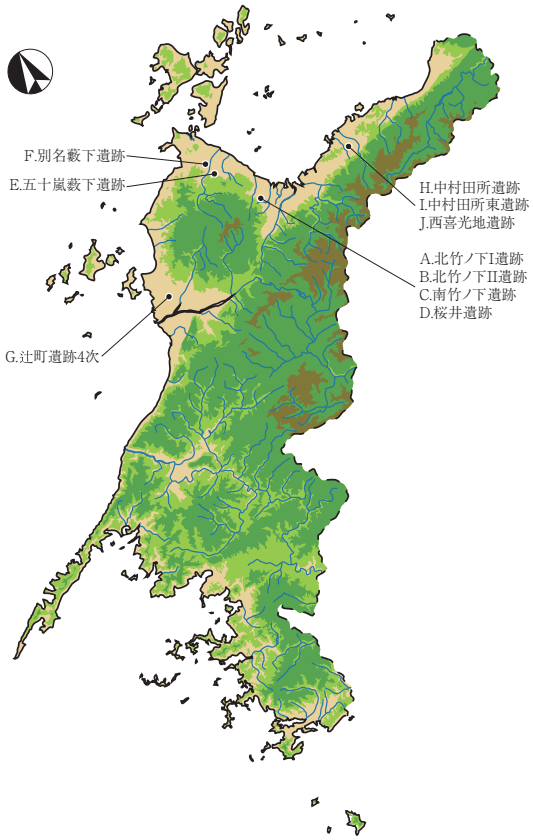
二〇二二（令和四）年五月

公益財団法人　愛媛県埋蔵文化財センター

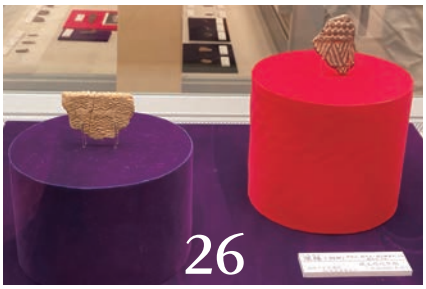
理事長　前園　實知雄


新谷遺跡群の鍛冶遺構（中期末～後期初頭）
新谷森ノ前遺跡SI07
新谷赤田遺跡SI04
新谷赤田遺跡SI33

愛比売



はじめに 02
目次 04
I 発掘調査と整理作業 05
受託した発掘調査と整理作業 05
発掘調査を実施した遺跡 06
A. 北竹ノ下 I 遺跡 06
B. 北竹ノ下 II 遺跡 08
C. 南竹ノ下遺跡 10
D. 桜井遺跡 12
E. 五十嵐藪下遺跡 14
F. 別名藪下遺跡 15
G. 辻町遺跡 4 次 18
報告書を刊行した遺跡 22
H. 中村田所遺跡 22
I. 中村田所東遺跡 23
J. 西喜光地遺跡 23
報告書刊行に向けて作業中の遺跡 25
II 普及活動事業 26
古代いよ発掘まつり 26
伊予の鍛冶 26
発掘へんろ展 27
ミニ企画展 27
現地説明会 28
職場体験 28
III その他の事業 29
IV 組織 31



Ⅰ 発掘調査と整理作業

私たちは考古学的な発掘調査、およびその成果を後世に残す報告書の作成に必要な遺物の接合・図化および各種データの分析などの整理作業をあわせて「埋蔵文化財調査」とよんでいます。

埋蔵文化財は法律により保護されていますが、道路等の開発により破壊されるものについては、開発者からの依頼を受け、記録保存を目的として、地方公共団体または当センターのような団体が埋蔵文化財調査を行います。

ここでは令和三年度に当センターが行った発掘調査および報告書の刊行を含めた整理作業について報告します。

なお、報告書を刊行した遺跡の詳細は、当センターより各図書館等に寄贈している報告書および当センターホームページ掲載のＰＤＦにてご覧いただけます。

壺棺墓 検出状況…北竹ノ下Ⅱ遺跡

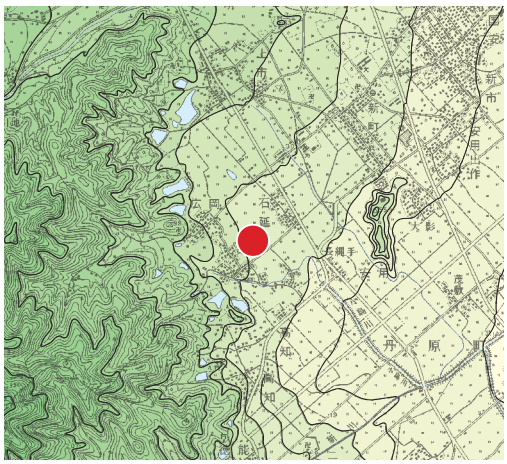
受託した発掘調査と整理作業

事業主体（委託者）	事業名称	遺跡名		契約面積（m²） 発掘調査	契約面積（m²） 整理作業	住所	時期	備考	受託金額（円）
国土交通省（愛媛県）［一部今治市・新居浜市とアロケーション］	松山管内埋蔵文化財調査	E	五十嵐薮下遺跡	3,360		今治市五十嵐	弥生時代～中世		今治市アロケーション +[21,269,600]
		F	別名藪下遺跡	8,190 +[2,156]		今治市別名	弥生時代・古墳時代・中世		
			新谷森ノ前遺跡２次		11,000	今治市新谷			347,006,000
			新谷古新谷遺跡２次		7,000	今治市新谷			
		H	中村田所遺跡		1,772	新居浜市中村松木	弥生時代	報告書刊行（第 203 集）	
		I	中村田所東遺跡		2,004	新居浜市中村松木・土橋	弥生時代・中世		
		J	西喜光地遺跡		2,969 +[153]	新居浜市西喜光地町	縄文時代・弥生時代・中世		新居浜市アロケーション +[547,800]
農林水産省（西条市）	道前平野農地整備事業	A	北竹ノ下Ⅰ遺跡	1,003		西条市石延・安用	縄文時代・弥生時代～古墳時代・古代・中世～近世		113,438,600
		B	北竹ノ下Ⅱ遺跡	1,570		西条市安用	縄文時代・弥生時代～古墳時代・中世		
		C	南竹ノ下遺跡	122		西条市安用	弥生時代		
		D	桜井遺跡	1,378		西条市新町・安用出作	弥生時代・中世		
愛媛県	松山駅西口南江戸線	G	辻町遺跡４次	2,592	800	松山市南江戸	古墳時代・中世		64,004,000

A

北竹ノ下Ⅰ遺跡

水田跡に隣接する弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落



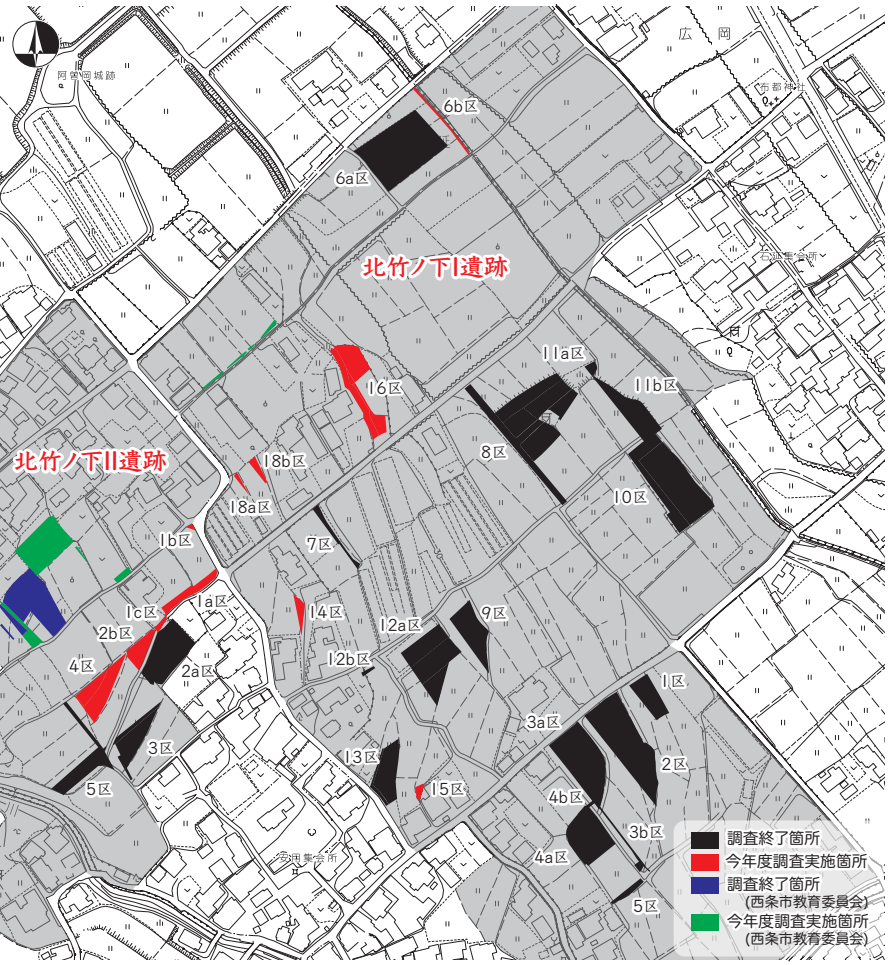
今回調査を行った北竹ノ下Ⅰ遺跡は、道前平野北西部、高縄山系東三方ケ森の山麓部に形成された新川扇状地の扇央部から裾合谷（すそあいだに）低地にかけて広がっています。この裾合谷低地は遺跡北側に位置する新池および古池から南東方向に伸びる低地帯で、その境界付近に立地する16区を境として、遺跡北東側と南西側ではおおきく地形が異なります。

4年目となる今回の調査では、遺跡西側に点在する14～16・18a・18b区、および遺跡北東側に位置する6b区の6箇所で調査を実施し、縄文時代・弥生時代後期～古墳時代初頭・中世後期～近世の遺構・遺物が出土しました。

堆積環境については、扇状地扇央部付近に立地する14～16・18a・18b区では縄文時代以降安定的な堆積を示すのに対して、裾合谷低地へ向かう斜面上に立地する16区や谷低地に立地する6b区では、低地の埋没が進む中世後期以前の時期には、大量の砂礫が継続的に供給される湿潤で不安定な環境にあったものとみられます。

縄文時代では、14・18a・18b区において縄文時代早期の押型文（おしがたもん）土器や石器、および落し穴の可能性を持つ土坑数基を確認しました。同種の遺物はこれまでに調査した北竹ノ下Ⅰ遺跡7・9区でも確認されており、遺物の構成にも類似点が多くみられます。このことは、北竹ノ下Ⅱ遺跡に中心を持つこの時期の遺跡の広がりが北竹ノ下Ⅰ遺跡西半部まで及ぶことを示す一方で、遺構・遺物の分布密度が極めて希薄であることは、今回調査を実施した地点が縄文集落の東側外縁部に相当することを示唆しています。また、当段階の遺構・遺物は16区以東には基本的に分布しないため、その東限を16区と18a区の間に想定することが可能です。

弥生時代～古墳時代初頭では、竪穴建物3棟・溝8条・土坑18基・柱穴65穴を確認しました。竪穴建物はこれまでの調査分を加えると総数29棟となり、比較的広範囲に及ぶ大規模な集落の存在を想起させます。ただ、竪穴建物の分布密度は北竹ノ下Ⅱ遺跡側の様相に近くやや散漫な在り方を示し、集落の外縁部の状況を示している可能性が考えられます。



きたたけのしたいち いせき

・所 在 地
西条市石延・安用

・所属時期
縄文時代・弥生時代～古墳時代・古代・中世～近世

・調査期間
令和３年４月～令和４年３月

・調査面積
1,003㎡

・調査原因
道前平野農地整備事業

・担 当 者
池尻伸吾　沖野実
田中いづみ　中野邦子

18a区　184号土坑 遺物出土状況

注目される遺構には竪穴建物のほか、18a区で確認された弥生時代後期中頃の廃棄土坑（184号土坑）などが挙げられますが、いずれも調査対象範囲が狭く、かつ点在して存在するため、集落の構成や内容に関しては不明な点が多く残っています。

中世では、6b区において14～15世紀の溝1条、16区において扇状地扇端部と裾合谷低地との境界付近に形成された自然流路数条を確認しました。16区で確認された自然流路の埋積土からは土師器や瓦器椀、白磁の細片などが出土しており、おおむね14世紀前半以降に低地部の埋没が進行するものとみられます。これまでの調査において、中世段階の集落は、堆積環境がより安定的な扇状地上には展開せず、埋没した低地部を中心に構築される傾向があり、今回の調査成果もそれを裏付けています。このような集落立地をとる背景は不明ですが、今後それらを検討することによって、過去の調査で確認された青磁筆架を所有する集団が当地に存在する意味やその歴史的背景に迫る手懸りが得られるものと考えられます。

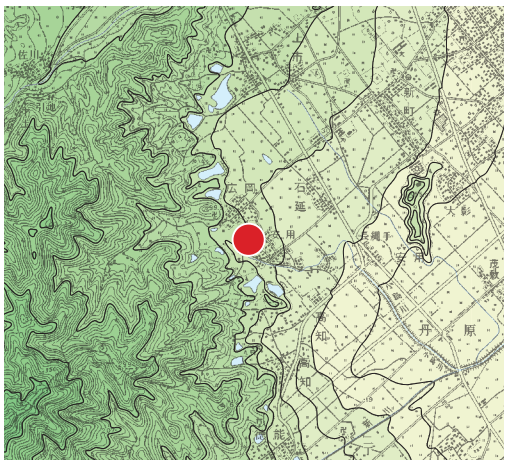
（池尻）

16区　谷部土層断面

B

北竹ノ下Ⅱ遺跡

・道前平野随一の規模を誇る縄文時代早期の大規模遺跡
・鍛冶工房と壺棺墓を伴う弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落跡



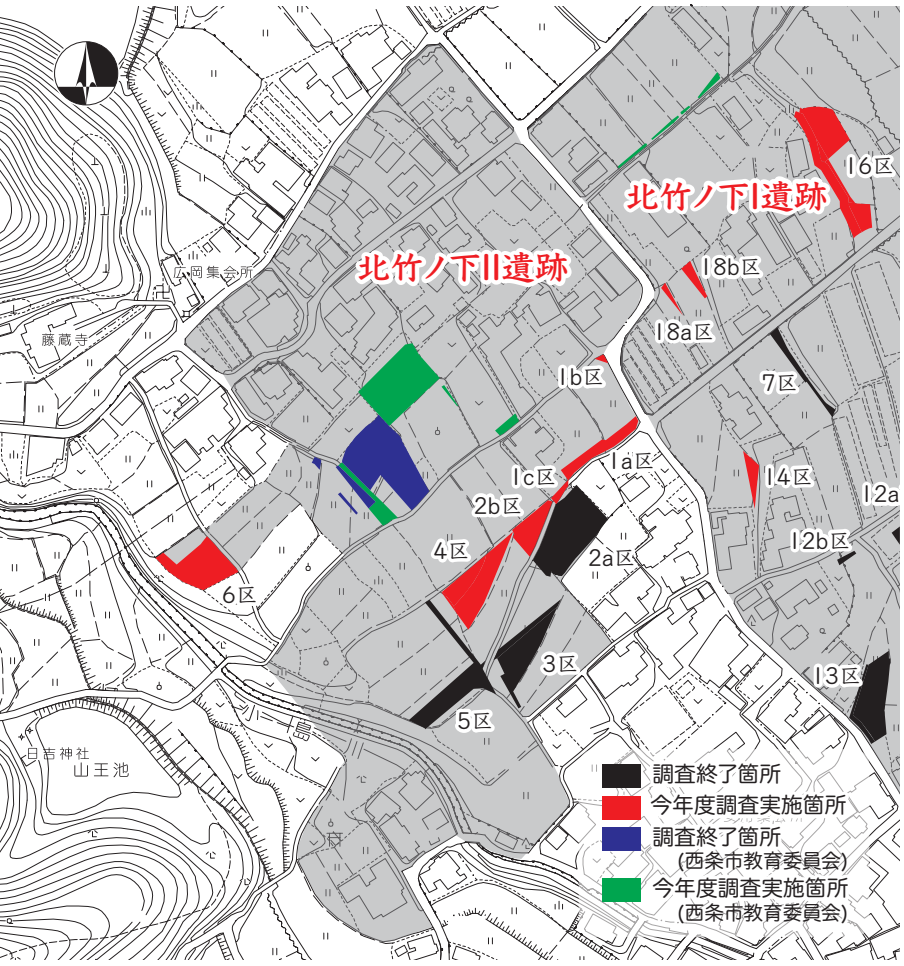
北竹ノ下Ⅱ遺跡は、高縄山系東三方ヶ森の山麓部に発達した新川扇状地扇央部の緩斜面に位置しています。

今回、当センターが調査を実施したのは、遺跡の東側に位置する1a～1c区・2b区・4区と遺跡の西端に位置する6区の計6箇所ですが、このほかにも西条市教育委員会が遺跡中央部の一角について発掘調査を実施しています。

2年目となる今回の調査では、前年度の調査と同じく、縄文時代早期および後晩期、弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構・遺物が確認されたほか、遺跡西端の6区において中世の遺構・遺物が確認されました。

縄文時代では、1a区を中心に、比較的多量の押型文土器・無文土器・石器のほか、落し穴とみられる土坑数基が確認されています。また、同段階の遺物は遺跡西端に位置する6区のほか、西条市教育委員会が実施した遺跡中央部付近からも数多く出土しており、当該期の遺構・遺物がさらに広範囲に分布している事実が判明しました。遺物の分布は2a区を中心として、周縁部にかけ密度が低くなる傾向がみられ、2a区付近において何らかの活動が行われていたものとみられます。出土した縄文土器には黄島式以前から高山寺式までの押型文土器と無文土器がみられますが、その大部分は高山寺式土器と無文土器で占められます。特に高山寺式土器の出土量と内容は県下でも突出しており、周辺地域における高山寺式土器の細分化や黄島式土器からの変遷過程の検討に大きく寄与する重要な資料といえます。また、県内ではいまだ整理の進んでいない押型文土器と無文土器の関連性の追求も大きな課題であり、今後、周辺の資料も援用しつつそれらの問題を検討していく必要があります。

このほか、注目される成果として、石鹸形磨石2点の出土が挙げられます。石鹸形磨石は主に堅果類の加工を目的として使用された石器です。南九州において出現し、その後東方へ波及するものと考えられており、時期的には縄文時代早期前葉に位置づけられます。この石器の四国内での分布はこれまで太平洋沿岸地域を中心とする四国島南部に限定されていましたが、本遺跡での発見により、瀬戸内海沿岸地域にも同石器が拡散していたことがはじめて明らかとなりました。石鹸形磨石の出土は、本



きたたけのしたにいせき

・所在地
西条市安用
・所属時期
縄文時代・弥生時代～古墳時代・中世
・調査期間
令和３年４月～９月
・調査面積
1,570㎡
・調査原因
道前平野農地整備事業
・担当者
池尻伸吾　沖野実
田中いづみ　中野邦子

1a区　113号土坑 土層断面

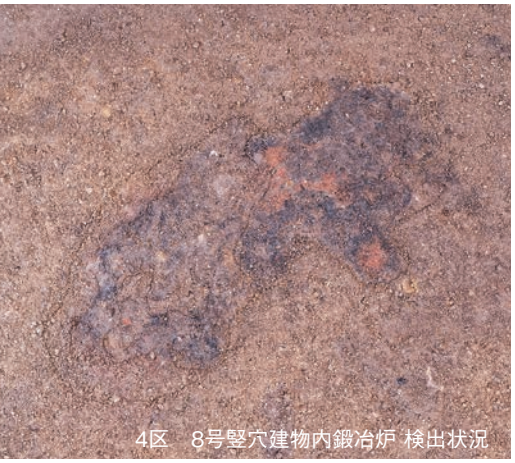
遺跡の形成に他地域の文化的影響が深く関与していたことを示す重要な証拠であり、昨年度調査で確認された複合鋸歯文をもつ押型文土器や石器の素材として多用されるサヌカイトなどと併せて、外来的文化要素の受容の様相や他地域との交流の実態を解明する必要があります。

弥生時代ではすべての調査区において、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構・遺物が確認されました。今年度の調査で新たに確認された遺構は竪穴建物1棟・鍛冶関連遺構1棟・溝5条・土坑34基・壺棺墓1基・柱穴173穴で、昨年度調査分と併せると竪穴建物の総数は7棟となります。これまでの調査によって、この時期の集落の広がりや集落と墓域の在り方を把握できたことは大きな成果といえますが、今回の調査において鍛冶関連遺構が確認されたことは、周辺地域での検出例の少なさもあり、非常に重要な知見といえます。

検出した鍛冶関連遺構は直径約8.5m程度の円形竪穴建物で、建物外縁部には幅約1mのベッド状遺構が敷設されています。柱構造は6本柱で、住居中央部には火処とみられる中央土坑が付帯します。検出された鍛冶炉は5基で、いずれも炉壁を持たず、炉底付近に被熱痕跡を留める簡素な構造のもので、配置に規則性はみられませんでした。部分的に重複関係を持つことから、5基が同時に併存したわけではなく、一定の期間内に操業と廃炉を繰り返した結果と捉えることができます。

道前平野への鉄製品の導入を考えるうえで最古のものとしては、大久保遺跡(西条市小松町妙口)で出土した鋳造袋状鉄斧が挙げられます。これは、弥生時代前期末から中期前葉のもので、県下でも最古級の資料として位置づけられています。ただ、これに後続する資料は、本遺跡周辺に所在する新池遺跡において、弥生時代後期の椀状滓(鉄を精錬する際、炉底に溜まる不純物の塊)が確認されているのみで、平野内における鉄器(生産)の普及や拡散についての様相解明は充分とはいえない状況にあります。いまだ類例に乏しく、評価については今後の課題といえますが、本遺跡において鍛冶関連遺構が確認されたことは非常に重要であり、道前平野の鉄器生産・鉄器の流通の在り方を今後検討していくうえで重要な資料と位置づけることができます。

このほか注目される遺構には、4区で確認された9号壺棺墓(P.5写真)があります。この壺棺墓は単独で存在し、棺身に大型の複合口縁壺の完形品を用い、口縁部の穴を打ち欠いた鉢の底部で密閉した、あまり類例のない土器棺の使用方法を採用しています。また、9号壺棺墓が確認された4区では竪穴建物・鍛冶関連遺構・壺棺墓が混在する状況がみられ、集落内の空間的な機能差やそれらの時期的な変化の過程を検討するうえで興味深い資料といえます。


4区　8号竪穴建物内鍛冶炉 検出状況

中世では、遺跡西端の6区において、土坑墓1基・土坑1基・柱穴10穴を確認しました。その他の調査区では同段階の遺構・遺物は極めて希薄で、北竹ノ下Ⅱ遺跡側ではこの時期の集落の形成は北竹ノ下Ⅰ遺跡と比較して低迷していたものとみられます。

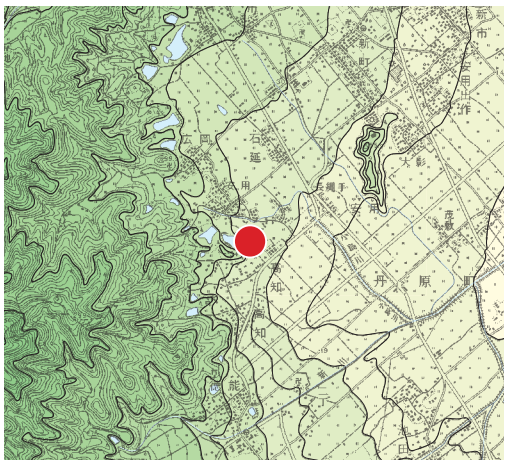
確認された8号土坑墓は直径50cm・深さ15cmの円形で、底面付近から四肢骨とみられる人骨5点と14～15世紀のものとみられる土師器皿2点が出土しています。周辺ではこのほかにも、西条市教育委員会が発掘調査を実施した箇所において古代の蔵骨器が出土するなど、本遺跡中央部から北寄りの箇所については、古代から中世の時期にかけて、主に墓域としての役割を担っていた可能性が考えられます。

(池尻)

C

南竹ノ下遺跡

広範囲に流下した古代の土石流



南竹ノ下遺跡は高縄山系東三方ヶ森の山麓部に形成された高位扇状地の扇頂付近に立地します。近年、道前平野農地整備事業に伴って本遺跡の北側では北竹ノ下Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査が継続しており、縄文時代～中世までの遺構や遺物が数多く確認されています。

今回の調査では遺物包含層から弥生時代後期の遺物を確認しましたが、当時の生活をうかがえるような遺構を確認することはできませんでした。ですが、先述した北竹ノ下Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査の成果と南竹ノ下遺跡の成果を照らし合わせることで両遺跡を取り巻く地形の形成過程が徐々にわかってきました。

遺跡内で確認した堆積土を見てみると上から順に4つの層に大別できました。上から順にみていくと、地表面(Ⅰ層)は近現代に利用されていた耕作土で、現在近辺で広く営農している田畑の耕作土と同様のものになっています。地表面直下には地表面より古い時期にあたる、近現代の遺物を包含していない田畑の耕作土が広く分布しており、地表面の耕作土と同様に均平に拡がっています。耕作土直下の層(Ⅱ層)は流水等の影響が少ない安定した堆積にも関わらず、鉄分やマンガン斑の沈着が認められ、調査区南側に接する水田耕作地と標高が近似することなどからⅠ層形成以前の耕作土とその床土である可能性が考えられます。このⅡ層には遺物は含まれていませんでした。Ⅱ層の下には遺物包含層(Ⅲ層)が広がっていました。遺物は弥生時代後期のもので、ごく少量出土しました。堆積は比較的安定しており、調査区内で広く分布していましたがⅢ層下面で遺構を確認することはできませんでした。次のⅣ層でも遺物の包含はみられませんでした。Ⅳ層上面はⅠ～Ⅲ層と異なり、大部分が上下に乱れており均平ではない様子でした。このⅣ層は高縄山系に起因する大量の深成岩の亜角礫(あかくれき)と粗粒砂によって構成された流路堆積物ということもあり、その上層であるⅢ層については、遺物は含んでいますが、流路が埋没していく過程で形成された止水性の堆積物としての性格を考慮する必要がある

調査区東壁　土層堆積状況(北西より)

調査区南壁　土層堆積状況(南西より)

みなみたけのしたいせき

・所 在 地
　西条市安用
・所属時期
　弥生時代
・調査期間
　令和３年４月～５月
・調査面積
　122 ㎡
・調査原因
　道前平野
　　農地整備事業
・担 当 者
　池尻伸吾　沖野実
　田中いづみ　中野邦子

調査区遠景（西より）

と考えられます。

これまで安用団地内で実施した北竹ノ下Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査において、南竹ノ下遺跡のⅢ層でみられたような弥生時代の遺物を確認した調査区は地形的に安定しており、土壌化の進んだ遺物包含層が調査区内に拡がっていた状況を確認しています。またそのような調査区では遺構を確認しており、遺構面を形成する基底層は砂とシルトによって構成されていました。この様相は南竹ノ下遺跡のⅣ層のようなゴロゴロとした礫が含まれる状況とは異なります。

南竹ノ下遺跡のⅣ層に含まれるような大きな礫で構成される流路堆積物の層は近隣でも確認されており、遺跡の北側に展開する北竹ノ下Ⅰ遺跡1～3区では弥生時代以降に造営された水田跡を被覆する人頭大から拳大程度の亜角礫を伴った厚い堆積があり、南竹ノ下遺跡のⅣ層によく似ています。この層の上面には古代（8～9世紀）の遺構面が形成されていました。さらに北竹ノ下Ⅰ遺跡の9区や13区でも南竹ノ下遺跡のⅣ層と似た礫で構成された古代の自然流路を、南竹ノ下遺跡の西側に展開する北竹ノ下Ⅱ遺跡の4区では弥生時代後期の遺構を侵食する自然流路を確認しています。また、南竹ノ下遺跡の北西側に位置する北竹ノ下Ⅰ遺跡6区と8区では、中世後期（15～16世紀）の遺構面の下で拳大程度の亜角礫を伴った粗い流路堆積物がみつかっています。

過年度に発掘調査を行なった調査区の土層の堆積状況を加味すると、南竹ノ下遺跡のⅢ層は古代の堆積物と似ており、この時期に安用周辺で広範囲に起きた土砂の堆積によって形成されたものであることが考えられます。そして土砂が流下する際に弥生時代の遺物も押し流した可能性が考えられます。このような土層の堆積は地域の自然史を考える上でとても貴重なものであり、それに大きく影響を受けたであろう人類史を考える上で大事なものといえるでしょう。

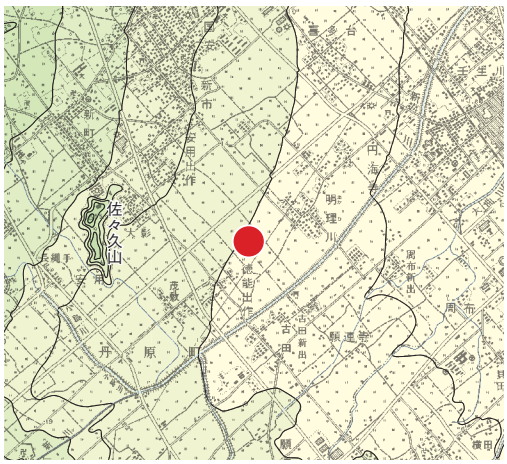
（沖野）

調査風景

D

桜井遺跡

新川左岸に位置する 弥生時代中期の円形周溝



桜井遺跡は佐々久山の東側に位置し、調査区の北側を流れる大明神川に由来する堆積物によって形成された扇状地上に立地します。

今回は1区と呼称した調査区で発掘調査を実施し、弥生時代中期・弥生時代終末・中世後期の遺構を確認しました。

時代ごとに見ていくと弥生時代中期では土坑・溝・小穴などを検出しました。今回の調査区で確認した遺構の大部分がこの時期に帰属します。その中でも1号溝・2号溝・4号溝は特徴的な遺構であり、環状にめぐる円形をしています。溝は完全な環状とはならず少しだけ途切れる部分があります。後世の堆積物による影響や溝の一部が調査範囲外に広がることなどから全容は不明ですが、直径9～12mほどの大きさであったと考えられます。溝の幅は約1mほどであり、断面形状はUの字状になります。遺物は少ないですが、1号溝から完形品の壺が1点、4号溝から壺の小片がわずかに出土しました。これらの特徴から1号溝・2号溝・4号溝は円形周溝であると考えられます。桜井遺跡で確認した円形周溝や土坑(2号土坑・3号土坑・4号土坑)は調査区中央付近の最も標高の高い部分に集中しており、そこでは竪穴建物などの集落を構成するような遺構が認められないことから、墓や祭祀的な遺構であった可能性も考えられます。残念ながら円形周溝の内側に埋葬施設となるような土坑や祭祀に使用されたような遺物を確認することはできませんでした

1号溝・2号溝 検出状況(北東より)

1号溝 遺物出土状況(南西より)

4号土坑 遺物出土状況(南西より)

さくらいいせき

・所 在 地
西条市新町・安用出作
・所属時期
弥生時代・中世
・調査期間
令和３年10月
～令和４年３月
・調査面積
1,378㎡
・調査原因
道前平野
農地整備事業
・担 当 者
池尻伸吾　沖野実
田中いづみ　中野邦子

が、仮に円形周溝や調査区内に集中する土坑を墓として考えるならば、桜井遺跡1区の周辺は弥生時代中期の墓域であった可能性も考慮する必要があるでしょう。

1号竪穴建物 検出状況（南西より）

円形周溝は、愛媛県内において松山平野を中心に数例確認されていますが、桜井遺跡の周辺では経田遺跡（今治市：弥生時代中期）と松ノ元遺跡（西条市：古墳時代初頭）の2箇所でしか確認されていないことからも、桜井遺跡での確認は重要なものといえるでしょう。桜井遺跡の周辺では複数の調査実施範囲を残しており、今後の調査によって新たな資料の増加があれば、この円形周溝が墓であるかどうかの検討や、同時にこれを作成した集落との関係性を導き出すようなことができるようになるかもしれません。

弥生時代終末では、調査区の北東端で竪穴建物を確認しました。この1号竪穴建物は一部が後世の掘削によって破壊されていたり、大部分が調査対象範囲の外に広がることなどから全容は不明ですが、一辺6mほどの方形を呈しています。桜井遺跡の1区で確認した竪穴建物はこの一棟のみですが、調査対象範囲の北東部分は比較的地形の変化も緩やかであり、包含層から出土する遺物の量も比較的多いため、桜井遺跡1区の東方にはこの時期の集落が広がっている可能性が考えられます。

中世では調査区南西部分で調査区を横断する自然流路を確認しました。調査区中央の微高地部分と反して調査区南西部は低くなり、湧水や流水の影響が強い部分となっています。この部分で検出した7号自然流路は北西から南東方向に幅を拡げながら流下しており、弥生時代の遺構面を含め下の層を大きく侵食しています。出土遺物は非常に少なく土師器片、白磁片などを確認しており、中世後期（15～16世紀）以降に埋没したものと考えられます。

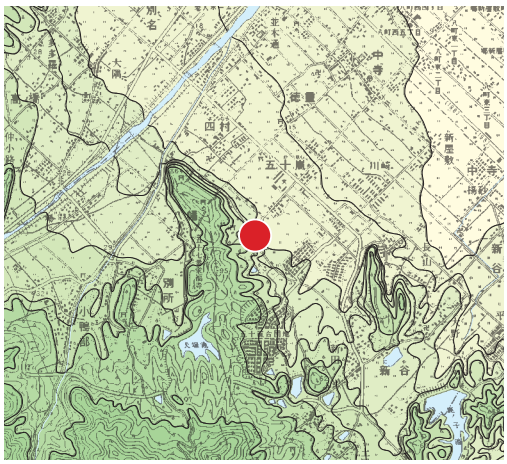
なお、自然流路の近くに中世後期の集落を構成するような遺構を確認することはできませんでしたが、周辺を見ると過年度の調査において安用出作団地の東方に位置する明理川団地（紫宸殿遺跡）で同じ時期の区画溝を確認しています。紫宸殿遺跡の区画溝は条里の区割りに合致するものなので、生産域と関連するような遺構と考えられます。そのため新川の左岸では桜井遺跡1区の南西部分や紫宸殿遺跡のような低地を中心に中世集落の経営を支える生産域が分布していたものと考えられます。

（沖野）

E

五十嵐薮下遺跡

中世鍛冶工房の周辺地形を探る



五十嵐薮下遺跡は、今治平野の南西部に所在し作礼山より分岐する五十嵐丘陵裾部に位置しています。

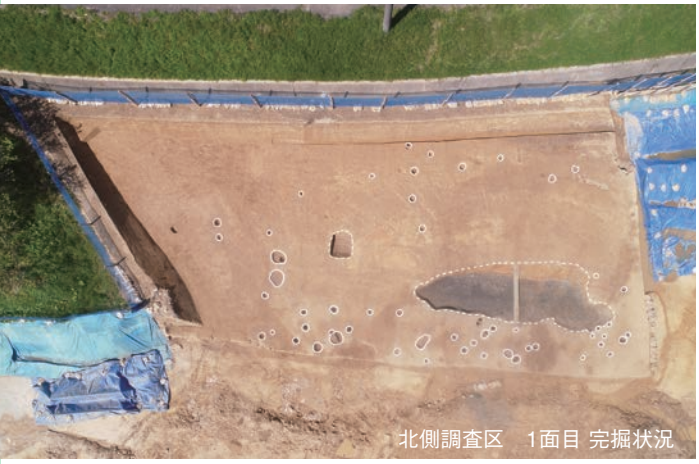
北側調査区は、昨年度に中世前期の鍛冶炉（かじろ）群が出土した場所の西隣であり、同じ遺跡と考えられます。調査地は、西から東方向へ傾斜しており西側の丘陵部へ向かう地形と考えられ、今回は鍛冶炉は出土しませんでしたが鍛冶工房の西端部に当たると推定できます。遺構は調査区東側に集中しており、そのうち柱穴は昨年度調査分と合わせて掘立柱建物が復元できる可能性もあります。

また、下層からは昨年度調査区へ続く中世以前の自然流路が出土しています。

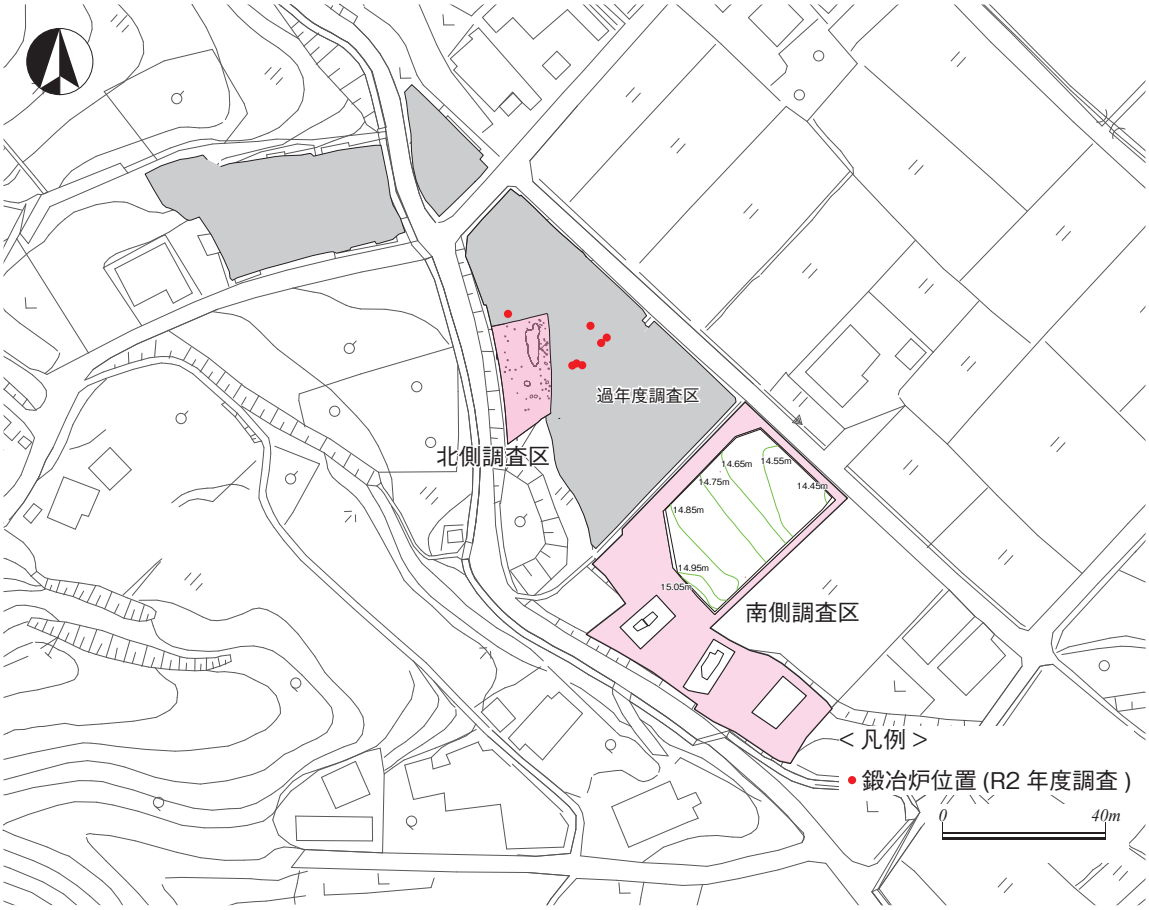
南側調査区は、全体的に谷状地形を成しており少量の遺物が出土しましたが、安定的に人々が活動していた痕跡はみられませんでした。

このように、中世鍛冶工房の西側は丘陵に接しており、南側には谷状地形が広がることが確かめられました。

（首藤）



北側調査区　1面目 完掘状況



調査区位置図

いかなしやぶした
いせき

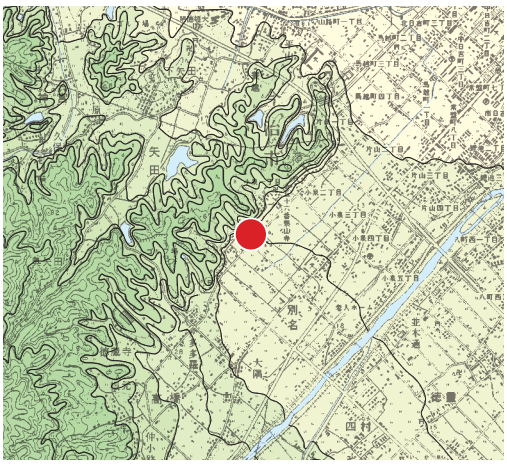
・所 在 地
今治市五十嵐
・所属時期
弥生時代～中世
・調査期間
令和３年４月～６月
・調査面積
3,360 ㎡
・調査原因
一般国道 196 号
今治道路建設
・担 当 者
三好裕之　首藤久士
青木聡志　岡美奈子
井下涼子　佐野祐樹
岡本真治

F

別名藪下遺跡

・日高丘陵南部の弥生時代終末～古墳時代初頭の集落縁辺
・中世後半の集落跡と大型井戸

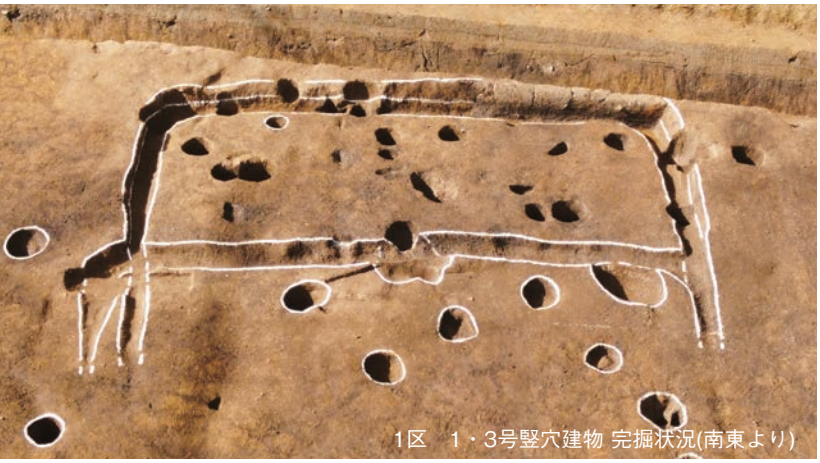
遺跡遠景



別名藪下遺跡は今治平野の東北部に位置し、行政区分では今治市別名に所在しています。本遺跡は、日高丘陵南部に形成された丘陵裾部および小開析谷の谷状堆積によって形成された扇状地上に立地しているため、調査区は北西から南東方向へ向かって緩やかに傾斜が下がっています。現況道路および宅地や水田の畦畔の境界によって合計8区に調査区を設定して調査を実施しました。

発掘調査時の土の堆積の観察から、いずれの調査区でも上下2面の遺構面が捉えられました。1面目の遺構の時期は中世後半(15～17世紀前半)であり、2面目の遺構の時期は古代(8～10世紀)および弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられます。遺構は、1面目では、掘立柱建物6棟・柵列10本・土坑11基・溝45条・自然流路1条・小穴521穴、2面目では竪穴建物3棟・土坑27基・溝4条・不明遺構4基・小穴220穴を検出しました。1面目、2面目ともに1区・2区・8区をはじめとした北東部の丘陵裾部を中心に遺構が展開しており、3区～7区の南西では、遺構の展開が希薄でした。

2面目は弥生時代終末～古墳時代初頭・古代の遺構面です。1区の南西部北側では1辺約4.5mを測る方形の1号竪穴建物と3号竪穴建物が重なり合って検出され、建て替えのあった可能性が考えられます。出土遺物には、高杯や小型丸底壺がありますが、これらは床面直上ではなく、いずれもやや浮いた状態で出土しています。そのため、建物の廃絶後ある程度時間が空いた状態で廃棄されたと推測されます。これらの遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての竪穴建物と考えられます。


1区　1・3号竪穴建物 完掘状況(南東より)

調査区全体が緩斜面である8区で検出された2号・3号・4号不明遺構は、馬蹄形の溝とその内部に柱穴をもつ遺構です。いずれも斜面下方の東側が開口部です。それらの規模は、長径約1.5～2.5m、最大深約50cmです。2号・3号不明遺構は溝の深さが一部深くなるのに対し、4号不明遺構は深さがほぼ均一です。これらの遺構では、遺物が出土していないため、明確な時期は分かりませんが、調査区および遺構堆積状況の観察から1区で検出された竪穴建物と同じ弥生時代終末～古墳時代初頭であると考えられます。愛媛県では類例がほとんどない状態であり、現時点で遺構の性格が判然としていないため、今後明らかにしていく必要が

べつみょうやぶしたいせき

・所在地
今治市別名
・所属時期
弥生時代～古墳時代・中世
・調査期間
令和３年７月～令和４年３月
・調査面積
10,346㎡
・調査原因
一般国道196号
今治道路建設
今治市道別名矢田線
・担当者
三好裕之　青木聡志
井下涼子　佐野祐樹
岡本真治

8区　4号不明遺構 完掘状況(東より)

8区　3・5号不明遺構 完掘状況(東より)

8区　2号不明遺構 完掘状況(東より)

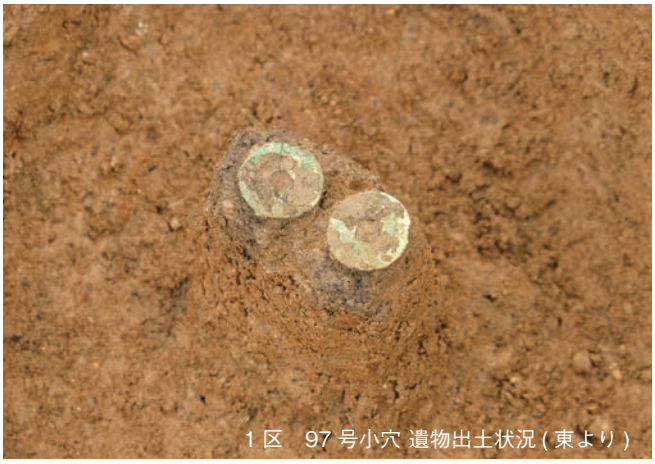
あります。同じく8区で検出された5号不明遺構は、平面形が不整楕円を呈しています。その規模は、長さ約3.6m、幅約1.2m、深さ約70cmであり、中央部が一番深く、東西両方向に行くに従い浅くなっています。断面形はU字型であり、北側がほぼ直立に立ち上がっているのに対し、南側の立ち上がりはやや緩やかな状態でした。5号不明遺構も遺物が出土していないため、明確な時期は分かりませんが、堆積状況から2号～4号不明遺構とほぼ同時期であったと推測されます。

1面目は中世後半(15～17世紀前半)の遺構面です。1号掘立柱建物は、北東方向を指向する2間×4間の掘立柱建物であり、南西に庇(ひさし)を伴っています。周囲には溝が3条巡り、そのうち北側と東側の溝は浅いため、1号掘立柱建物に伴う雨落ち溝の可能性が考えられます。2号掘立柱建物は1間×3間、3号掘立柱建物は1間×2間であり、これらは北西方向を向いている建物です。4号掘立柱建物は1間×2間、5号掘立柱建物は1間×2間、6号掘立柱建物は2間×4間であり、1区の南西付近で検出され、いずれも北東方向を向いています。2号掘立柱建物と3号掘立柱建物、および4号掘立柱建物と5号掘立柱建物は重複しているため、建て替えが行われたことが想定されますが、柱穴からは遺物がほとんど出土していないため、これらの前後関係は不明です。これらの建物群の周辺では、建物に対して直交もしくは並行している溝や柵列が検出されました。6号溝状遺構と10号溝状遺構を境に北東および南東方向では遺構の展開が希薄になっているため、集落を区画している溝の可能性が考えられます。8区の中央部で検出された1号井戸は、平面形が円形であり、直径約3.3m、深さ約2.3m、石組みの内径は約1.4mを測る、すり鉢状を呈した2段掘の石組みの井戸です。石材は花崗岩(かこうがん)の円礫であり、近くの河川から採取されたものと考えられます。基底面から約30cmの高さまで長手積み(長辺を表面に露出する積み方)で積まれ、それよ

1区　1面目 掘立柱建物

8区　1号井戸 結物検出状況（西より）

8区　1号井戸 石組み（南より）


1区　97号小穴 遺物出土状況（東より）

り上は小口積み（短辺を表面に露出する積み方）で構築されていました。基底面には直径70cm、高さ20cm程度の結物（短冊状の木の板を円筒状に並べ、竹などのたがで締めた木製品）が設置されていました。埋土からは16世紀後半～17世紀前半の備前焼が出土しているため、この時期に廃絶されたと考えられます。

1区の97号小穴では、土師質土器皿2点が割られた状態で検出され、土器の下部からは熙寧元寶と不明銭の合計2枚が出土しました。出土状況から地鎮祭祀に伴う遺構と考えられます。1区の100号小穴では椀形滓（鍛冶炉の底に溜まる溶けた金属くず）が出土しました。別名藪下遺跡では鍛冶炉が検出されていませんが、周辺で鍛冶が行われていたことが推測されます。

各調査区の調査最終段階で、重機により2～3m程度の深さで掘削を行い堆積状況を調べました。結果、周辺の谷から流入した弥生時代～古代の遺物が多く出土しており、1区～7区にかけて旧地形の谷が広がっていることが判明しました。これらの谷状堆積は、周辺の端谷や寺谷から由来するものと考えられます。中世以前には埋没しており、中世後半には谷部周辺に集落が形成されていることが判明しました。

今後も続く周辺の調査と併せて、この地域の歴史が解明されていくことが期待されます。

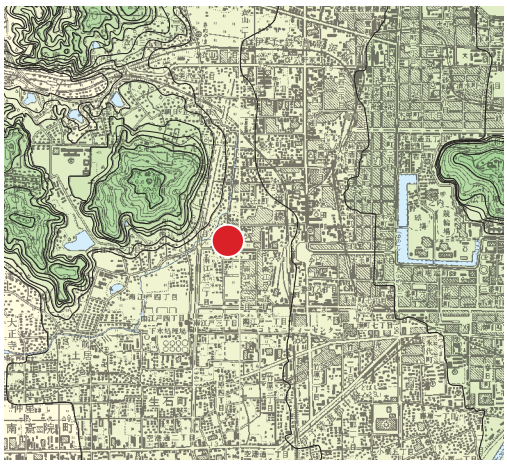
（青木・三好）

現地説明会

G

辻町遺跡4次

争乱の時代の「青山」
～戦国の乱世を生きた人々の墓地～



愛媛県はJR松山駅付近連続立体交差事業と連携して、都市計画道路松山駅西口南江戸線の建設工事を進めていますが、その道路建設予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である辻町遺跡と重複するため、令和3年4月から発掘調査を行っています。

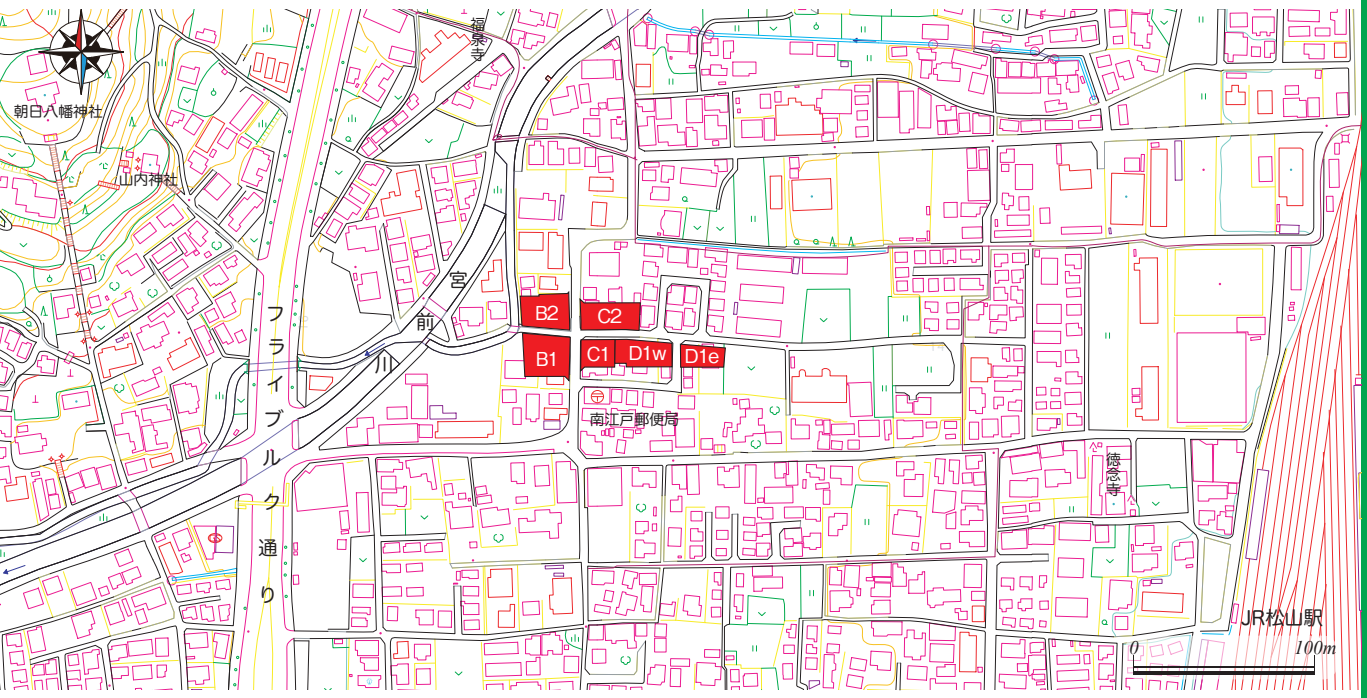
辻町遺跡は松山平野北半部の沖積低地の中央付近に位置し、遺跡の周辺は東西を独立丘陵である城山（勝山）と大峰ケ台（西山）に挟まれた回廊状の地形で、その低地を宮前川が流れています。宮前川は石手川扇状地の扇頂にあたる岩堰付近で石手川から分流し、城山の北を西流したのち南へ向きを変え、辻町遺跡付近では北から南へ向かって流れています。

宮前川はいくつかある石手川の主要な河道の痕跡のひとつと考えられ、宮前川が氾濫と河道の移動を繰り返したことで、流域には湿地と自然堤防状の微高地が入り組んだ複雑な地形が形成されています。そして堆積が進んで離水し、乾燥した微高地上に各時代の集落が形成されていったと考えられます。

辻町遺跡では過去に3度の発掘調査が行われていて、今回の調査が4次調査となります。これまでの発掘調査では中世の集落跡や古墳時代の祭祀遺構などが確認されています。今回の調査箇所は松山市が行った2次調査地に隣接する場所で、道路などで隔てられた6区画（B1区・B2区・C1区・C2区・D1e区・D1w区）を対象に調査を行いました。

発掘調査では、中世と古墳時代後半期の二時期からなる遺構や、各時代の遺物を発見しています。

中世では平安時代末から江戸時代初頭にかけて営まれたと考えられる集落跡と戦国時代頃の墓を、古墳時代では5世紀後半頃の建物跡などを発見しました。そのなかでも、特に注目されるのは15世紀後半から16世紀頃のものと考えられる墓地です。辻町遺跡を含む古照～南江戸一帯は松山平野内でも比較的多くの中世墓が発見されている地域ですが、今回発見



発掘調査を実施した遺跡

つじまちいせきよじ

・所在地
松山市南江戸
・所属時期
古墳時代・中世（鎌倉～戦国時代）
・調査期間
令和3年4月～11月
令和4年3月
・調査面積
2,592㎡
・調査原因
都市計画道路松山駅西口南江戸線建設工事
・担当者
眞鍋昭文　石貫睦子

C1 区 20 号土坑

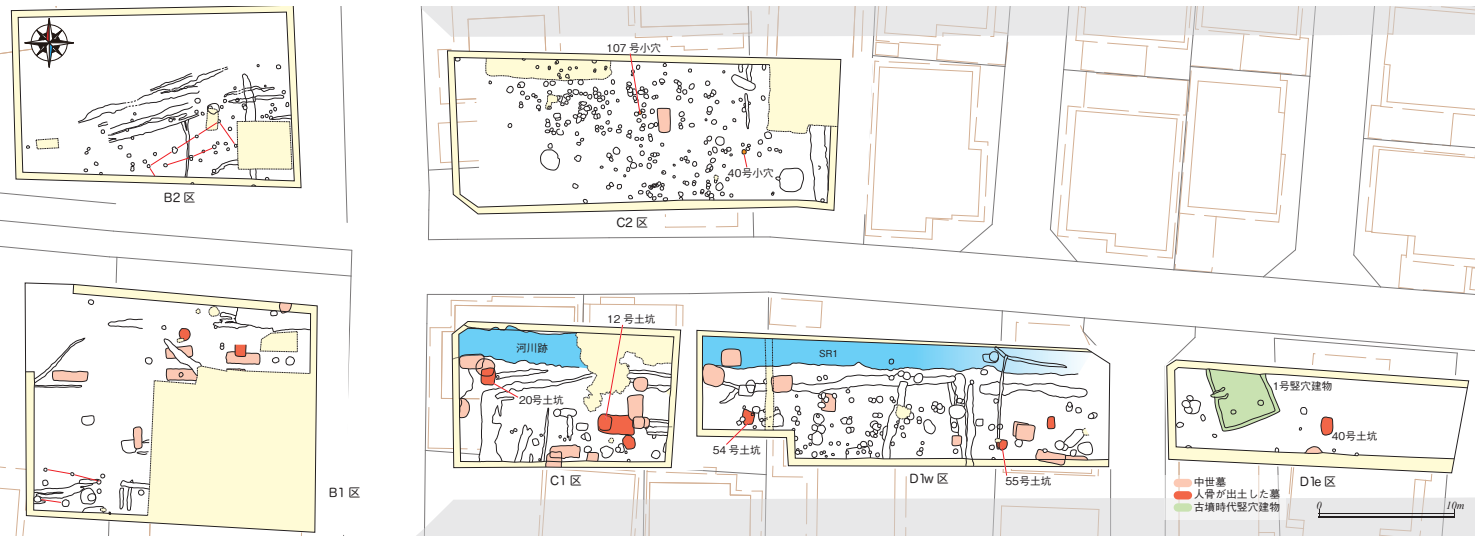
されたのは40基ほどの墓が密集して造られた墓地で、これほどの数の墓で構成された墓地の発見というのは愛媛県内では初めての事例となります。

今回の調査地は市道を挟んで南北に分かれていますが、市道北側のB2区・C2区が中世を通じて生活エリアであったのに対し、南側のB1区・C1区・D1区は中世のある時期に墓地として利用されていたことがわかりました。この市道は太平洋戦争後に川を埋めて道路としたもので、今回の発掘調査でも市道沿いに東から西へ向かって流れる河川跡が確認されています。この河川がいつからこの場所を流れていたのかはわかりませんが、中世の遺跡の様相が川の右岸と左岸で大きく異なっているという調査成果からは、遅くとも左岸に墓地が造られた中世後期にはこの場所を流れており、彼我を隔てる境界としての意味を持っていたと考えることができます。

発見された墓はいずれも16世紀を中心とした時期のものです。総数は40基ほどで、そのうちの9基から人骨が出土し、さらにその中の3基(12号・20号・54号土坑)では棺材も残っていました。

このうちC1区で出土した20号土坑は、墓坑(墓穴のこと)の平面形状が長辺117cm、短辺100cmの隅丸長方形を呈し、主軸は南北を指向しています。墓坑の中央には縦80cm、横50cmの大きさに竹で組んだ棺を設え、遺骸は頭を北にして西向きに横たえたいわゆる「頭北面西右脇臥」の姿勢で、手足を折り曲げた状態で葬られていました。四肢骨や脊柱、歯などの比較的残りやすい部位はもちろんのこと、指などの末節骨が残るほど保存状態が良好です。棺の底面に床材らしきものは確認できませんでしたが、横方向に3本、対角に1本の竹管が差し渡されていることから、蓆などの軟質で腐りやすい有機質素材のものが敷かれていた可能性も考えられます。遺骸の胸前あたりには朱色の漆椀が1点供えられていました。また、棺の西外には、曲物桶の底板と見られる板材が置かれていました。

Dlw区で発見された54号土坑は、直径70cm前後の円形の墓坑の中



D1w区　54号土坑

に、亀山焼の大甕を棺として据え、その中に膝を抱えた姿勢で遺骸が納められていました。棺と墓坑の壁との隙間に土師器杯が副葬されていました。遺骸の長骨の長さや頭蓋の大きさと棺の大きさとの比較から発見当初は再葬墓である可能性も考えていましたが、形質人類学の専門家に分析を依頼したところ、被葬者に対して棺は十分な大きさがあり、埋葬姿勢にも不自然な点はないので、死後そのまま棺に納められたと考えて良いとのことでした。

また、同じDlw区で発見された55号土坑では、直径77cm前後の不整形な円形の墓坑から人骨と副葬品の土師器杯が出土しています。棺は残っていませんでしたが、人骨の下に炭化した木材の一部が残っていましたので、詳しい形状は不明ながら木製の棺に葬られていた可能性が高いと考えられます。あるいは、Dle区で発見された40号土坑では、副葬品の土師器杯とともに長方形の墓坑の角から鉄釘が出土していることから、箱形の木棺が存在していたと考えられます。

今回発見した墓を分析すると、墓坑の平面形は長方形と円形のものがあり、長方形のものは方位を強く意識し、南北もしくは東西に主軸をとっています。出土した人骨は、甕棺に座った姿勢で葬られていた54号土坑を除くとすべて北枕で葬られ、人骨が出土した墓には副葬品として土師器杯か漆椀のいずれかが供えられていました。それに対し、人骨が残っていなかった墓では例外なく副葬品は供えられていませんでした。このことは副葬品の供献と人骨の遺存に相関関係があったことを示していると言えます。

副葬品が供えられた墓は供えられない墓より手厚い埋葬であったと言うことができますが、その手厚さとは副葬品とともに棺に遺骸を葬る行為をも意味していると考えられます。そして、棺の有無こそが人骨が残るか腐蝕して残らないかを大きく左右したのではないかと推測することができます。つまり、遺骸を棺に納めて葬った墓にはもれなく副葬品が供えられ、棺が遺骸と土との接触を妨げることで遺骸の分解を遅らせて人骨が遺存したのに対し、棺に納めず遺骸を墓坑に直葬した墓には副葬品が供えられることもなく、遺骸が直接土と触れていたために腐蝕が進んで人骨が残らなかったと推測できるのです。

C2区　107号小穴

同じ墓地に埋葬されていた被葬者たちは、同じ集団(一族)あるいはごく近しい関係の集団に属していたと考えられます。推測の域を越えませんが、そうした埋葬の手厚さの違いは、集団内においてもある程度の社会的地位や富裕度に差があったことを物語っていると言えそうです。

このように河川の南側が墓地として使われていた一方で、河川の北側は12世紀から16世紀にかけて人々が生活し活動する居住空間として利用されていたと考えられます。建物がどういうふうに建てられていたかを具体的に復元するのは難しいのですが、相当数の柱穴を含むおびただしい数の小穴が確認されたことから、この場所は中世を通して長期間に渡り屋敷地として利用されていたことがわかります。

C2区　40号小穴

これらの小穴の中には、柱材を抜

き取った痕跡が確認できるものがいくつも見つかっています。C2区で発見した107号小穴では、柱材を抜き取った後の穴に3点の土師器椀を詰め込んでいます。また40号小穴では、穴一杯に14点の土師器杯と、4枚の北宋銭を重ね合わせて詰め込んでいました。こうした行為は埋納と言われ、家を壊す時などに、その土地の神様を鎮めるお祭り（地鎮祭）に伴う儀礼のうちのひとつと考えられています。

D1e区　1号竪穴建物

そのほか、軟弱地で地面に埋めた柱が沈下するのを防ぐための礎盤と呼ばれる石を柱穴の底に置くものや、柱が倒れないように柱の周りに裏込め石を詰め込んだ柱穴なども見つかっています。それらの石には、使い古した金床石や砥石、石臼なども使われています。

遺物は小穴に埋納された土師器の皿杯椀類、瓦器の椀や小皿、銭貨などのほかに、包含層中からも土鍋や三足付土釜などの土師質土器の煮炊具類、備前焼や常滑焼、瀬戸美濃産天目茶碗などの国産陶磁器類、あるいは青磁や白磁などの輸入磁器類、そのほか墓に副葬された漆器椀など多種多様なものが出土しています。

一方、古墳時代の遺構や遺物はおもにD1e区から出土しています。

1号竪穴建物は東西方向に比べて南北が少し長い長方形の平面形を呈しています。建物の北側部分は調査区の外へ続いているため正確な大きさは不明ですが、長辺5m弱、短辺約4.4mの大きさの住居と考えられます。屋根を4本の主柱で支える構造と考えられますが、今回の調査区内で検出した主柱の柱穴は2つです。住居の壁際に周壁溝を巡らせ、西壁の中央にはカマドが造り付けられています。カマドは天井部が潰れて内部に崩れ落ちていましたが、焚き口付近にかき出された炭が溜まっている状況や、戸外に煙を排出する煙道などがはっきり確認できました。また、カマドの中央部には土師器の高杯が上下逆さまに伏せた状態で置かれていました。これは、カマドを廃棄する時に行う祭りに伴う行為と考えられています。そのほか、建物内からは甕や高杯などの土師器類、有蓋高杯や蓋杯などの須恵器が出土していて、この竪穴建物の年代はこれらの出土品が示す5世紀後半頃であることがわかりました。

近接する2次調査地でもたくさんの土師器や須恵器が出土した同じ時期の遺構が見つかっていて、それらの遺構は水に関する祭祀を行った跡ではないかと言われています。今回の調査ではC1区・C2区以西の調査区では古墳時代の遺構は確認されていません。この周辺は北東から南西に向かって徐々に土地が低くなっていることから、古墳時代の遺跡は2次調査地やD1区周辺の比較的高い場所を中心に広がっていたのではないかと考えられます。

さて、前にも少し触れましたが、辻町遺跡を含む松山駅西側の南江戸一帯では、これまでに古照遺跡7次調査、辻町遺跡2次調査、北斎院地内遺跡、南斎院土居北遺跡、南江戸上沖遺跡などで中世墓が見つかっていて、松山平野内でも中世墓が多く発見されている地域と言えます。また、中世墓のほかにも、南斎院土居北遺跡や松環古照遺跡、南江戸上沖遺跡などでは豪族の居館（方形館）を取り囲む堀と考えられる溝状遺構が確認されています。今後は、今回の発掘調査で見つかった遺構・遺物を詳細に分析し、こうした地域の特殊性を踏まえた上でその歴史的評価をして行く必要があります。

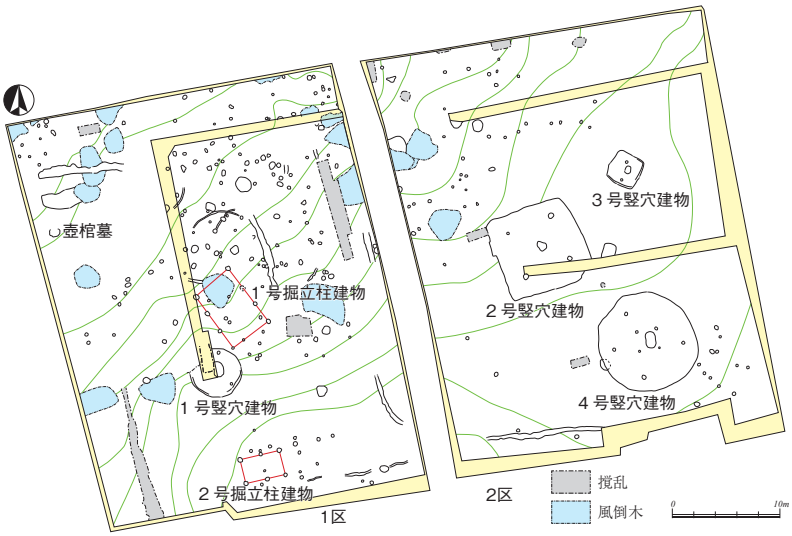
中世の遺跡が数多く存在する南江戸一帯は、中世村落の景観を精密に復元することができる松山平野内でも有数のフィールドと言えます。今回の辻町遺跡の発掘調査はその歴史景観モデルの復元に貴重なデータをもたらす重要な成果であると評価できます。

（石貫・眞鍋）

H

中村田所遺跡

新居浜市域で調査例が少ない弥生時代終末期頃の集落遺跡



一般国道11号新居浜バイパス建設に伴い、平成29年度～令和2年度に新居浜市内で中村田所遺跡・中村田所東遺跡・西喜光地遺跡の発掘調査を行い、令和3年度に報告書を刊行しました。

中村田所遺跡は新居浜平野西寄りの国領川扇状地性氾濫原に位置し、尻無川左岸に立地しています。遺跡は縄文時代から中世の遺構・遺物が出土しており、弥生時代終末頃の集落が中心です。

縄文時代では、土坑や小穴より縄文時代後期の土器が出土しましたが、建物が出土せず居住の痕跡が無いことから、当時の人々が一時的に滞在した場所であったと考えられます。

弥生時代では、竪穴建物4棟や掘立柱建物1棟、壺棺墓1基などが出土しました。竪穴建物は円形と方形の平面形がみられ、各1棟は大型建物でした。2～4号竪穴建物は焼失建物であり、焼土や炭化材が多く出土しました。火災時には柱穴内に柱が残されていた形跡がなく、建物は地山ブロックを含む土で埋められていたことから、建物の使用後に焼却され埋め戻された可能性を考えています。使用された木材は、2号竪穴建物では5種類が使用される一方、4号竪穴建物ではクヌギ節のみと建物により使用状況が異なっており、建物の時期差や周辺の植生などを反映しているものとみられます。

1号壺棺墓　壺

掘立柱建物は1棟のみでしたが、柱穴が多く分布する調査区北方には他にも建物が存在していた可能性があります。

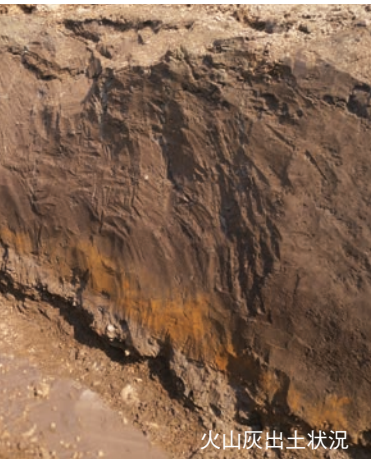
集落の西側では、壺を棺に使用した墓が見つかりました。集落域の西側に隣接し、墓の西側では地形が急傾斜になることから、集落の外れに単独で営まれた墓と考えられます。

遺跡より出土した弥生土器は多くが地元で作られたと考えられますが、胎土に角閃石（かくせんせき）を含む香東川（こうとうがわ）下流域産土器は香川より運ばれたとみられ、当時の人々の交流をうかがうことができます。

中世では掘立柱建物や土坑が出土しました。掘立柱建物の柱穴より割られた土師器（はじき）皿が出土し、穴の埋め戻しに伴い何らかの儀式が行われたものと考えられます。

また、遺跡より出土した火山灰は理化学分析から鹿児島県の鬼界（きかい）アカホヤ火山灰（約7,300年前）の二次堆積とされ、新居浜地域において貴重な例となります。

（首藤）


火山灰出土状況

なかむらたどころいせき

- 所在地
  新居浜市中村松木
- 所属時期
  縄文時代・弥生時代・中世
- 刊行時期
  令和４年３月
- 調査面積
  2,772㎡
- 調査原因
  一般国道11号新居浜バイパス建設
- 報告書担当者
  首藤久士　岡美奈子

I 中村田所東遺跡

新居浜平野における弥生時代中期の小規模な集落

なかむらたどころひがしいせき

・所　在　地
　新居浜市中村松木・土橋
・所属時期
　弥生時代・中世
・刊行時期
　令和４年３月
・調査面積
　2,004 ㎡
・調査原因
　一般国道 11 号
　新居浜バイパス建設
・報告書担当者
　首藤久士　岡美奈子

中村田所東遺跡は弥生時代中期の集落が中心で、中世の遺物も出土しています。弥生時代では竪穴建物・掘立柱建物・土坑などが一定の範囲内で出土しており、当時の最小生活単位の一部であると考えられます。竪穴建物は明確に地面を掘り込んだ状況が確認できず、同じような例が近隣の星原市東（ほしばらいちひがし）遺跡にもみられることから、建物は作られた当時から掘り込みが明確ではなかった可能性もあります。また、建物内よりサヌカイトの剥片が一定量出土し、建物内で石器製作が行われたと考えられます。

掘立柱建物は2棟が隣り合っており、建て替えの可能性もありますが、柱穴の重なりもなく遺物も少ないことから、詳細は不明です。

集落の南側では直線的な小規模河川が出土しました。東隣の尻無川より分水し、生活用水としての利用のほか下流域には、現在新居浜地域ではみつかっていませんが水田域の存在も想定できます。

（首藤）

J 西喜光地遺跡

弥生時代中期の低地部集落の掘立柱建物群

にしきこうじいせき

・所　在　地
　新居浜市西喜光地町
・所属時期
　弥生時代・古代・中世
・刊行時期
　令和４年３月
・調査面積
　3,122 ㎡
・調査原因
　一般国道 11 号
　新居浜バイパス建設
　新居浜市道西喜光地町
　副道１号線建設
・報告書担当者
　首藤久士　岡美奈子

西喜光地遺跡は、尻無川右岸に隣接した弥生時代中期の集落であり、ほかに古代～中世の遺構や遺物も確認されました。弥生時代では掘立柱建物群や土坑が出土しています。掘立柱建物は出土遺物が少なく時期は明確ではありませんが、9棟が弥生時代中期と考えられます。建物は南西側を中心に分布しており、建物の長軸方向は多くが旧地形に沿ったものと推定されます。建物の柱穴は、多くが直径50cm以下で小規模という特徴があり、県内では報告例が少ないですが香川県では弥生時代に確認されていることから、愛媛県内でも小規模な柱穴を持つ掘立柱建物が存在すると考えられます。6号掘立柱建物は他の建物群から離れた北東端にあり、柱穴の形や大きさ、柱間などの構造が他の建物と異なっていることから、他の建物と性格に差があると考えられます。土坑から出土した石庖丁（いしぼうちょう）はサヌカイト製と地元の石材（泥質片岩（でいしつへんがん）など）

掘立柱建物群 完掘状況

を使用した2種類が伴ってみられ、当時の石材利用の様子がうかがえます。今回は竪穴建物が確認できませんでしたが、微高地であり掘立柱建物などの遺構が集中する南方向に建物の存在が想定できます。

このように、集落は立地より河川と深い関係を持つと考えられるとともに、石斧や石庖丁、石鏃の出土から当時の人々が稲作などの農耕のほか、狩猟など複数の生業を行いつつ、生活していたと推定できます。

古代では溝から瓦片が出土しました。瓦は細片で摩耗していますが、遺跡周辺で瓦の出土が知られている河内廃寺遺跡の他にも瓦葺き建物の存在を示している可能性が高いと考えられます。

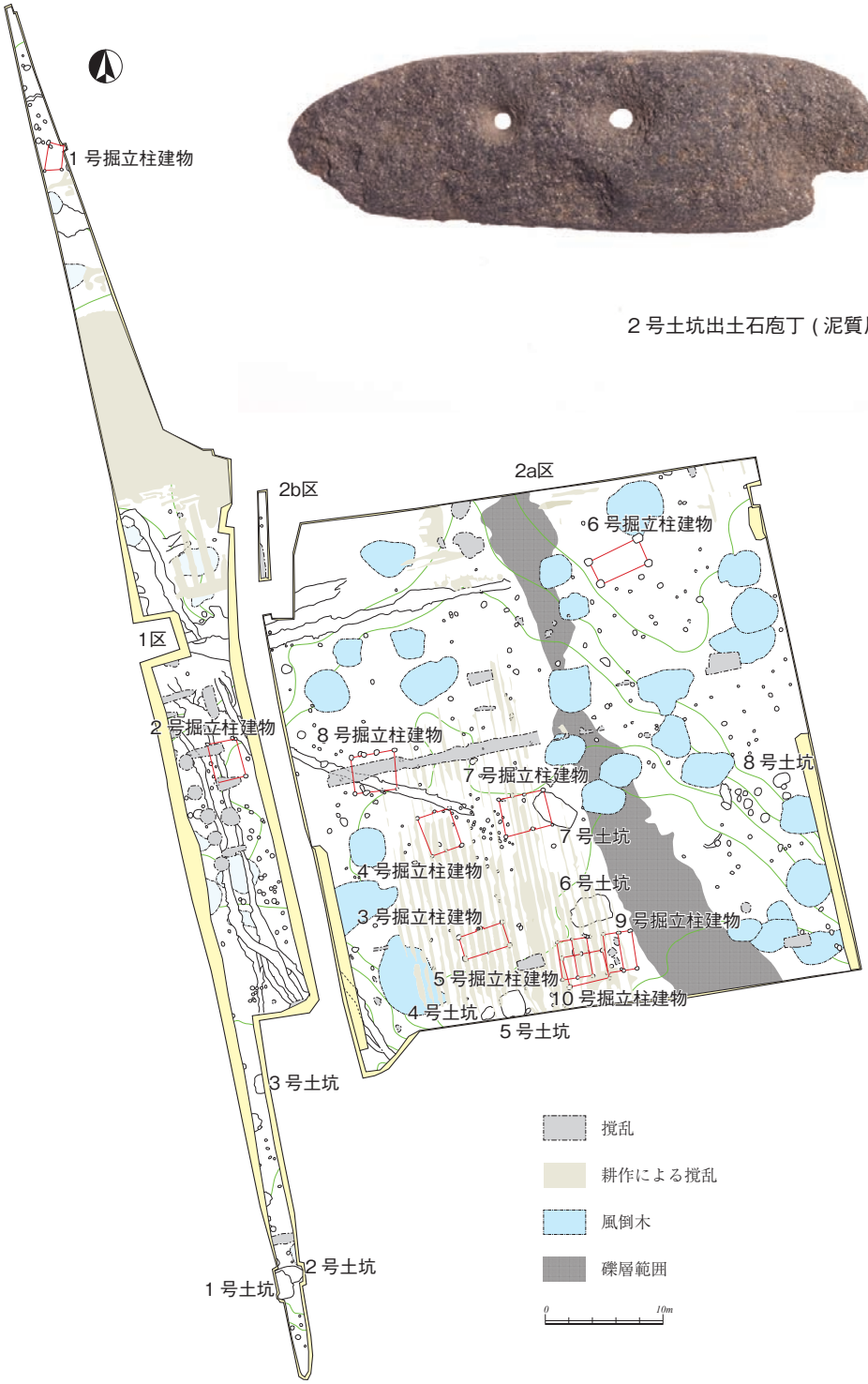
中世では内面黒色土器や瓦器椀（がきわん）、白磁椀（はくじわん）など前期の遺物がまとまってみられ、尻無川中流域周辺には中世前期の集落も存在すると捉えられます。

なお、微高地である南側を中心に多くみられる撹乱は、昭和期に別子銅山の鉱毒問題に対応して実施された土壌汚染対策（天地返し）と関連するものと想定されます。

（首藤）

弥生時代遺物

2号土坑出土石庖丁（泥質片岩製）



報告書刊行に向けて作業中の遺跡

遺物の接合復元作業 (その 1)

機械による遺物注記作業

遺物の洗浄作業

遺物の実測作業 (その 1)

遺物の選別作業

遺物の接合復元作業 (その 2)

コンピュータによる遺構図のトレース作業

コンピュータによる遺物のトレース作業

遺物の実測作業 (その 2)

編集作業

遺物の写真撮影作業

遺物の拓本作業

報告書刊行に向けての作業を私たちは「整理作業」とよんでいます。

出土遺物に関して行う作業は、まず水洗いする「洗浄」・出土情報を直接書き込む「注記」・破片をつなぎ合わせて足りないところを石膏や樹脂で補う「接合・復元」・観察を行い図化して報告書に掲載できるようにする「実測・トレース」・「写真撮影」など多岐にわたります。

現場から持ち帰った遺構の測量図は全体および個別の遺構ごとにトレースを行います。

これらの基礎的な整理作業を行ったのち、遺物・遺構およびその他の情報をあわせて多元的に分析・検討しながら報告書を作成していきます。

整理作業中の遺跡

○新谷森ノ前遺跡２次

担当者：乗松真也　土井光一郎
石貫弘泰　増田晴美
山口莉歩　古谷里砂子

○新谷古新谷遺跡２次

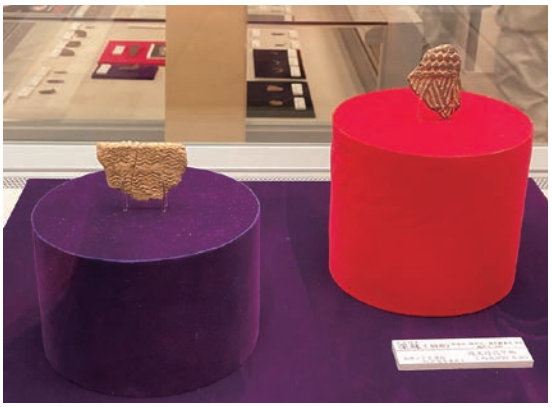
担当者：松村さを里　藤本清志
西川真美　富山亜紀子
古谷里砂子

○辻町遺跡４次

担当者：眞鍋昭文　石貫睦子

「古代いよ発掘まつり」（開催場所：松山市考古館）

愛媛県埋蔵文化財センター・松山市立埋蔵文化財センター　共催



contents

速報展前期展「掘ったぞな松山２０２１」
内　容：松山市内で発掘した遺跡を紹介
開催期間：令和３年７月10日（土）～８月19日（木）
見学者数：１１０２名

速報展後期展「いにしへのえひめ２０２１」
内　容：松山市以外の県内各地で発掘した遺跡を紹介
開催期間：令和３年12月３日（金）～令和４年１月23日（日）
見学者数：８８３名

講演会
内　容：押型文土器とその時代 ―約８０００年前の愛媛―
講　演　者：兵頭勲（愛媛県教育委員会文化財保護課 係長）
開　催　日：令和３年12月18日（土）
参加者数：48名

報告会
内　容：五十嵐薮下遺跡の発掘調査成果
松村さを里（愛媛県埋蔵文化財センター）
北竹ノ下Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査成果
池尻伸吾（愛媛県埋蔵文化財センター）
開　催　日：令和４年１月15日（土）
参加者数：23名

「伊予の鍛冶 ―今治平野の古代から中世の鍛冶工房を中心に―」

愛媛県埋蔵文化財センター・愛媛県生涯学習センター　共催

contents

展示「伊予の鍛冶 ―今治平野の古代から中世の鍛冶工房を中心に―」
開催期間：令和３年６月５日（土）～７月４日（日）
開催場所：愛媛県生涯学習センター
見学者数：５７８名

学び舎えひめ 歴史・考古学講座（愛媛県生涯学習センターで開催）

第１回「今治の歴史と鉄器生産」
講　演　者：村上恭通（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター長）
開　催　日：令和３年６月12日（土）
参加者数：60名

第２回「五十嵐薮下遺跡の発掘調査成果」
講　演　者：松村さを里（愛媛県埋蔵文化財センター）
開　催　日：令和３年６月13日（日）
参加者数：33名

第３回「中世の鍛冶」
講　演　者：笹田朋孝（愛媛大学法文学部 准教授）
開　催　日：令和３年６月27日（日）
参加者数：49名

令和3年度四国地区埋蔵文化財センター　発掘へんろ展

「四国の風土と暮らし　―山から四国を眺めてみた―」

四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展実行委員会

contents

展示「四国の風土と暮らし　―山から四国を眺めてみた―」

愛媛会場
開催期間：令和3年6月1日(火)～7月4日(日)
開催場所：松山市考古館
見学者数：1198名

高知会場
開催期間：令和3年7月18日(日)～9月12日(日)
開催場所：高知県立埋蔵文化財センター
見学者数：960名

香川会場
開催期間：令和3年10月4日(月)～12月12日(日)
開催場所：香川県埋蔵文化財センター
見学者数：418名

徳島会場
開催期間：令和4年1月7日(金)～3月13日(日)
開催場所：徳島県立埋蔵文化財総合センター
見学者数：968名

展示説明会
説明者：沖野実(愛媛県埋蔵文化財センター)
開催日：令和3年6月26日(土)
開催場所：松山市考古館

講演会「四国の山稜・山間に展開した弥生人について」
説明者：柴田昌児(愛媛大学埋蔵文化財調査室 教授)
開催日：令和3年7月4日(日)
開催場所：松山市考古館

ミニ企画展

「ツノ谷古墳・新谷石ヶ谷古墳群と古墳時代後期の鉄製農工具」

contents

展示「ツノ谷古墳・新谷石ヶ谷古墳群と古墳時代後期の鉄製農工具」
開催期間：令和3年6月21日(月)～令和4年3月18日(金)
開催場所：愛媛県埋蔵文化財センター 1階展示コーナー
見学者数：111名

現地説明会

「北竹ノ下Ⅱ遺跡」（地元住民対象）
「別名藪下遺跡」（地元住民対象）
「辻町遺跡４次調査」

contents

「北竹ノ下Ⅱ遺跡」（地元住民対象）
開催日：令和３年８月７日（土）
開催場所：西条市安用
参加者数：69名

「別名藪下遺跡」（地元住民対象）
開催日：令和３年10月４日（月）～６日（水）
開催場所：今治市別名
参加者数：75名

「辻町遺跡４次調査」
開催日：令和３年10月22日（金）～24日（日）
開催場所：松山市南江戸
参加者数：２１０名

北竹ノ下Ⅱ遺跡

北竹ノ下Ⅱ遺跡

辻町遺跡4次

別名藪下遺跡

辻町遺跡4次

「職場体験」

info.

開催日：令和３年11月10・11日（水・木）
開催場所：愛媛県埋蔵文化財センター
参加者数：３名（松山市立南中学校）
担当：松村さを里・増田晴美

1.出版物等への資料提供

提供資料	提供先	掲載物
新谷古新谷遺跡2次調査:4区 谷1-II層出土木製琴ほか写真3点	公益財団法人 元興寺文化財研究所	『元興寺文化財研究所研究報告 2021』2022年3月
祝谷畑中遺跡:弥生土偶写真3点	学校法人 国際文化学園 (美容考古学研究所)	『月刊SNiP STYLe2月号 No.435』2022年1月 (株式会社 コワパリジャポン)

2.展示等への資料提供

貸出・提供資料	提供先	資料使用目的
妙住院屋敷遺跡:遺構検出状況ほか写真6点	愛媛県教育委員会	令和3年度 なりきり歴史体感事業 「100年前にタイムスリップin萬翠荘」での写真展示
経田遺跡:出土平形銅剣埋納遺構レプリカ / 銅剣出土状況ほか写真5点 久枝II遺跡:下層遺構面検出状況ほか写真9点 上井遺跡:SD-7遺物出土状況ほか写真5点 図録えひめ発掘平成史: 「平成時代の発掘調査の地点と推移」地形図データ	愛媛県歴史文化博物館	令和3年度テーマ展 「東予と南予の弥生文化と青銅器」 パネル展示ほか

3.ウェブサイトほかへの資料提供

貸出・提供資料	提供先	掲載物
北井門遺跡2次調査:大型器台写真2点	愛媛県歴史文化博物館	令和3年度 京都国立博物館との相互賃借事業による広報物(京都国立博物館広報誌及びホームページ等)
祝谷畑中遺跡:弥生土偶写真 長田2号墳:玉類装飾品写真	愛媛県教育委員会	文化庁ホームページ・文化財の盗難等に関する情報提供特設ページ「取り戻そう！みんなの文化財」

4.資料見学等の受け入れ

見学資料・対象	主体団体・講座など	実施日	人数	実施場所(対応)
発掘調査現場見学	松山市立新玉小学校(6年生)	令和3年10月27日(水)	97名	辻町遺跡4次発掘調査現場(眞鍋昭文・石貫睦子)
発掘調査現場見学	西条市立吉岡小学校「吉岡校区ふるさとウォーク」	令和3年10月29日(金)	62名	北竹ノ下II遺跡発掘調査現場(池尻伸吾・沖野実・田中いづみ・中野邦子)
センターの施設・作業の見学	愛媛大学法文学部集中講義「博物館資料論」 (担当:幸泉満夫 准教授)	令和3年12月27日(月)	37名	愛媛県埋蔵文化財センター衣山事務所(柴田圭子)

愛媛大学法文学部集中講義「博物館資料論」での施設見学

八幡浜市「歴史・文化探検」学習会(踏査)

5.講演・講座等への職員派遣など

派遣内容	主催	実施場所	実施日	内容・対応職員
愛媛新聞 カルチャースクール 「楽しく考古学－入門編－」	愛媛新聞社	愛媛県生涯学習センター	令和3年6月19日(土)	「伊予の鍛冶」展示解説：松村さを里
		愛媛新聞・愛媛電算ビル	令和3年7月3日(土)	伊予の鍛冶 展示関連「五十嵐薮下遺跡の概要」：松村さを里
コミュニティカレッジ「愛媛の埋蔵文化財講座」	愛媛県生涯学習センター	愛媛県生涯学習センター	令和3年8月31日(火)	「愛媛県内出土の鉄製農工具 -古墳時代後期を中心に-」石貫弘泰
			令和3年9月28日(火)	「愛媛県の須恵器事情」石貫睦子
			令和3年10月26日(火)	「妙見山1号墳 -伊予型特殊器台が出土した前期古墳-」松村さを里
東予コミュニティカレッジ「歴史講座」	愛媛県生涯学習センター	愛媛県総合科学博物館	令和3年8月1日(日)	「西条市北竹ノ下遺跡で発掘された縄文土器とその時代」沖野実
テーマ展関連講座	愛媛県歴史文化博物館	愛媛県歴史文化博物館	令和3年10月3日(日)	「今治道路建設に伴う弥生時代遺跡の調査成果」松村さを里
西条市考古歴史館「考古学講座」	西条市考古歴史館	西条市考古歴史館	令和3年11月14日(日)	「北竹ノ下I遺跡出土の青磁筆架とその背景」沖野実
今帰仁城跡案内ガイド養成講座	今帰仁村教育委員会	今帰仁村歴史文化センター	令和3年11月19日(金)	「今帰仁城跡出土の青磁について」柴田圭子
八幡浜市「歴史・文化探検」学習会	八幡浜市教育委員会	八幡浜市津羽井・高野地・松柏	令和3年12月11日(土)・令和4年1月8日(土)	踏査：藤本清志
勝瑞学講座	藍住町教育委員会	[オンライン開催]	令和4年2月26日(土)	「貿易陶磁器が語る日本の歴史」柴田圭子

6.職員の委員等就任状況

職員名	委員名	期間
柴田圭子	松山市文化財保護審議会委員	令和3年4月1日～令和5年3月31日
	今治市文化財保護審議会委員	令和2年11月1日～令和4年10月31日
	砥部町文化財保護審議会委員	令和3年4月1日～令和4年3月31日
	史跡能島城跡調査・整備検討委員会委員	令和3年4月1日～令和4年3月31日

7.各種団体への職員派遣など

内容(依頼団体)	派遣先	日時	対応
えひめの未来チャレンジ支援事業に伴う現地指導(松野町教育委員会)	松野町埋蔵文化財センター	令和3年10月15日(金)・11月30日(火)・令和4年3月28日(月)	柴田圭子
埋蔵文化財調査報告書作成に関する指導(今治市)	今治市庁舎文化財整理室	令和3年12月14日(火)	柴田圭子・首藤久士
国府探査試掘調査(今治市)	今治市中寺 試掘調査対象地	令和3年11月中旬・12月上旬	眞鍋昭文

8.図書資料の収集・登録・貸し出し

関係団体が発行する報告書･埋蔵文化財関連書籍等を収集し、登録･保管（令和3年度新規登録図書数：1,729冊・総登録数：77,835冊）のうえ、大学はじめ関係者等への貸出を行った。

9.ホームページ・Twitterによる情報発信

従来のホームページに加えて、令和3年度よりTwitterアカウントの運用を開始し、業務におけるトピックやエピソード、共催展の告知等の情報発信を行った。

Ⅳ 組織

役員等（令和四年三月末日現在）

理事

理事長
前園　實知雄
奈良芸術短期大学教授、法蓮寺住職、奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員

常務理事
藤田　享
（公財）愛媛県埋蔵文化財センター事務局長

理事
栗田　正己
聖カタリナ大学非常勤講師、元松山東高校長

加藤　令史
愛媛新聞社常務取締役　常務執行役員

梅木　謙一
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
松山市立埋蔵文化財センター所長兼松山市考古館長

西山　俊実
愛媛県教育委員会文化財保護課長

監事

宇都宮　欣毅
税理士

評議員

下條　信行
愛媛大学名誉教授

名本　二六雄
愛媛考古学協会名誉会長

足立　一志
松前町教育委員会教育長

豊田　将光
愛媛銀行常務取締役

仙波　純子
愛媛県教育委員会副教育長

令和三年度職員（令和四年三月末日現在）

事務局長　藤田享

総務課

総務課長（事務局長が事務取扱）　藤田享
担当係長　河野有美
事務員　芳野伸吾
事務補助員　芝加納子

調査課

調査課長　柴田圭子
主幹　眞鍋昭文
担当係長　三好裕之　乗松真也　松村さを里　池尻伸吾
専門調査員　藤本清志
主任調査員　西川真美　土井光一郎　石貫弘泰　沖野実
調査員　首藤久士　石貫睦子　増田晴美　山口莉歩　青木聡志　岡美奈子　田中いづみ　中野邦子　富山亜紀子　井下涼子　佐野祐樹　岡本真治　古谷里砂子

令和三年度に刊行した書籍（調査報告書以外）

○「愛比売」令和二年度年報
○「紀要愛媛」第17号

愛比売（えひめ）

2021(令和3)年度年報

～発掘調査事業および普及活動事業の記録～

2022(令和4)年5月

編集・発行　公益財団法人　愛媛県埋蔵文化財センター

〒791-8025　愛媛県松山市衣山四丁目68番地1

TEL(089)911-0502　FAX(089)911-0508

印　　刷　アマノ印刷　有限会社

http://ehime-maibun.or.jp/

https://twitter.com/ehime_maibun